

# 水曜 働く・暮らす

## 障害あるから足りなさ気づける

札幌のNPO理事長 小山内さんエッセー

40年以上、障害者運動に携わってきたNPO法人「札幌いちご会」理事長を務める小山内美智子さん(63)は札幌市西区IIがこのほど、これまでの歩みを振り返った新著「おしゃべりな足指 障がい母さんのラブレター」(中央法規出版)を出版した。

脳性まひで、幼い頃から足と口以外ほとんど体が動かせなかった。市内の障害児施設や養護学校に通ったが、スタップにいじめられるなどつらい目にもあった。「自分は何もできない、邪魔な存在なんだ」。だが、16歳の時、父が買ってくれた電動のひらがなタイプライターによって、そんな負い目が消えた。

わずかに動く足の指で文字を打ち手紙や作文を書いてみた。職業訓練で学んだ手紙の代筆で自信がついた。「書くことで自分の世界が広がった。障害者も人間として様々な経験ができる社会を作りたいと思うようになった」と振り返る。

北欧などで進んでいた障害者が社会で普通に暮らす「ノーマライゼーション」の理念にも影響を受け、1977年に仲間と「いちご会」を設立。80年から市内のアパートでひとり暮らしを始めた。ボランティアの介助を受けながら生活し、84年に結婚。翌年には男児を出産した。

「不自由なことが多い障害者は、社会に足りないものに気づけるんです」。ケア付き住宅の建設や、障害者も使える多目的トイレの設置などを粘り強く行政と交渉し実現させる一方、これまでの経験を、10冊以上の著書にまとめてきた。

障害が進み、足指で文章が書けなくなったが、口述筆記で執筆活動を続ける。「施設にいる障害者ももっと地域で暮らせるようにならなければいけない。今後も、誰もが心地よく生き、死んでいける社会を求めていきたい」と話している。

(丹野宗文)

会の歴史



新著を出版した小山内美智子さん＝札幌市西区